

人生には災害、病気、経済的困窮といった多くの「苦難」があります。日々の生活の中で、家庭や職場でこうした苦難に直面した経験をお持ちの方も多いでしょう。苦難により心が打ち沈み、心配や疲労で精気を失うこともあります。

しかし、『万人幸福の葉』には「明朗の心、一日も一分も曇らしてはならぬのは、人の心である。朝はほがらかに起き、昼はほがらかに働き、夜はほがらかに休む」とあります。どんな時でも明朗な心を保つことが大切なのです。

A氏の勤務する会社のある日の役員会で、「長年にわたり、グループ会社のB社の再建がうまくいっていない」と口々に意見が上がりました。そこで、営業部長であったA氏が、社長として出向するよう命じられ、B社の再建を任されることになりました。社長に就任したA氏は、それまで取締役営業部長として多くの企業を担当してきました。明るく雰囲気の良い会社には頻繁に通っていましたが、活気がなく暗い雰囲気の会社には、正直なところ行きたくないと感じていました。

A氏が出向先のB社に初めて訪れた際、まず感じたのは、B社の雰囲気は暗く、足を運びたくないというものでした。

純粹倫理を学んできたA氏は、「明朗（明るさ）は大切である」と頭では理解していましたが、明朗な心が企業の盛衰を左右することを実感している経営者は少ないのではないかと考えていました。



再建の鍵は明朗な心と 寄り添う姿勢から

そこで、この暗くじめじめした雰囲気を解消するために、まず役員や従業員に明るい挨拶をすることから始めました。A氏が毎日明るい挨拶を続けると、少しずつ社内活気が見られるようになり、「一緒に頑張っていこう」という空気が漂い始めました。それからひと月後、A氏は全社員を集め、今後の企業方針を示しました。「全部署を回り、皆さんの働く姿を見て、話を聞かせてもらい、色々と考えました。要望として出たことは全部やりますよ！」と決意を述べると、社員全員から歓声が上がりました。理想的な企業集団を作り上げるには、風通しを良くし、チームワークを高めることが重要です。A氏は「業績が落ちても退職せず頑張ってきた社員のことを考え、もう一度、社員が会社を思う心に賭けたのです」と当時を振り返ります。

「人間関係さえ良くなれば、経営は八割方成功すると言っても過言ではない」と考える経営者もいるでしょう。生まれ育った環境や年齢、性別、考え方が異なる人々が、一つの企業組織で目標に向かって進むのは確かに困難です。

しかし、お互いに向かい合っていては、どんなに努力しても企業の成長は難しいでしょう。挨拶が育んだ明朗な心は、社内に連帯感をもたらし、それによって業績も回復していききました。明朗な心と良好な人間関係が企業の成功には不可欠なのです。

A氏の取り組みから、その重要性を学んでみてはいかがでしょうか。